

1 3. 新潟県におけるてんかん診療連携—西新潟中央病院— (2023 年)

国立病院機構西新潟中央病院副院長 遠山 潤
 国立病院機構西新潟中央病院臨床研究部長 福多 真史

まとめ

- 2022 年度の西新潟中央病院の新規てんかん患者数は、最近 7 年間でもっとも少なかったが、県外からの紹介患者の割合は 2021 年と同様であった。
- てんかん外科件数も 2021 年度と同様であったが、側頭葉切除、焦点切除、離断術などの開頭を要する手術件数が減少した。
- 研修セミナーや市民向けの講演会などは Web 開催で行われ、高い視聴者回数を維持していた。

1. 診療実績

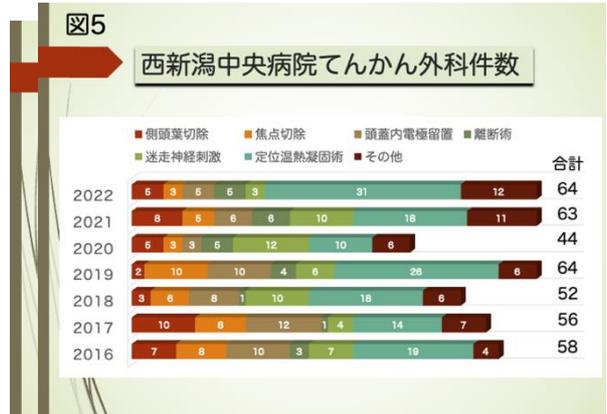
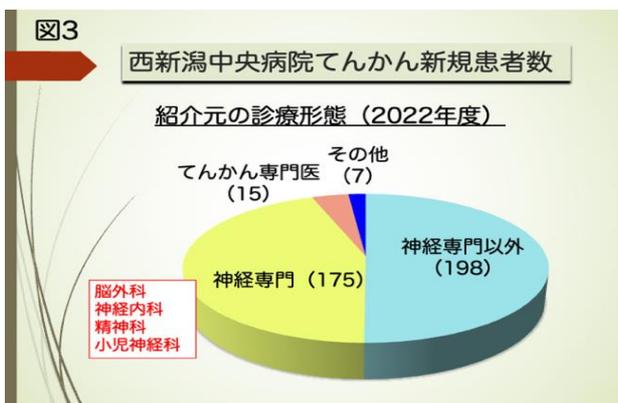
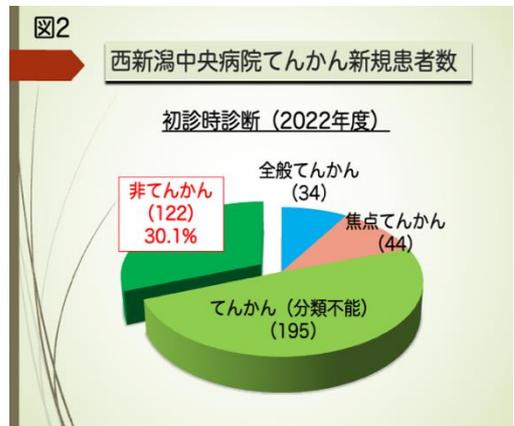
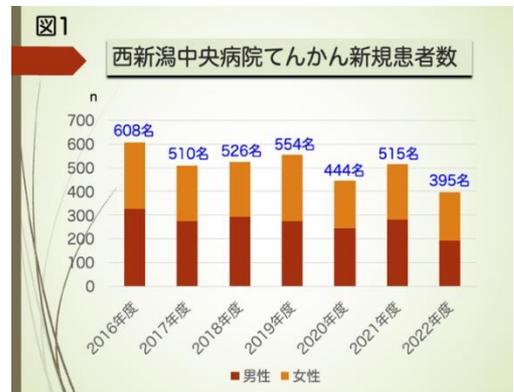
現在当院のてんかんセンターは、2023 年度 4 月からは小児神経科医 7 名（てんかん専門医 2 名）、精神科医 1 名（てんかん専門医）、脳神経外科医 5 名（てんかん専門医 4 名）、脳神経内科医 1 名の 14 名で診療を行っている。てんかんの診療機器としては、1.5 テスラ MRI、SPECT、MEG、ビデオ脳波記録 5 台などで、例年と変わりはない。

2022 年度のてんかん新規患者数は 395 名で、最近 7 年間の中で最も少なかった（図 1）。2021 年度は 515 名と COVID-19 のパンデミックの影響で落ち込んだと思われる 2020 年度の 444 名から回復傾向にあったが、2022 年度は 2021 年度よりも 100 名以上の患者数減少となった。原因は不明だが、COVID-19 の感染の波が 2021 年度以降も繰り返されて、受診控えがまだ続いていることが一つの要因かもしれない。

2022 年度の初診時診断では、例年と比較してその割合に著変はなく、2022 年度の非てんかん症例は 122 名（30.1%）で、これも例年とほぼ同様の割合だった（図 2）。

紹介元の診療形態は神経専門医（脳外科、脳神経内科、精神科、小児神経科など）とそれ以外に分けたが、ほぼ同様の割合であった。（図 3）。てんかん専門医からのご紹介の患者数もほぼ例年通りだった。

紹介元の地域は新潟市が 214 名（54.2%）、新潟県全体では 348 名（88.1%）で、割合としては、2021 年度の県全体の割合が 93.6% であったので、県外から紹介患者の割合は増加したことになる（図 4）。とくに近県である山形県は 2021 年度が 0 だったのに対して、2022 年度は 4 名、富山県は 4 名だったが、9 名に増加した。2022 年度の新規てんかん患者数は減少したが、県外からの患者数は、前年とほぼ同数かやや増加したという結果だった。山形県の日本



海側、福島県の会津地方、長野県の北部、群馬県の北部、富山県などはてんかん専門施設が少なく、てんかん治療難民が相当数存在していると考えられ、さらなる近県へのてんかん啓発活動が必要と思われる。

2022年1月から12月までの当院でのてんかん外科の手術件数は64件で、2021年の件数と同等であった(図5)。海外や県外からの視床下部過誤腫に対する定位温熱凝固の症例数の割合は高いが、開頭術による側頭葉切除、焦点切除、離断術の件数は13件と、コロナ禍で手術件数をもっとも少なかった2020年の件数と同じであった(図5)。もともとの対象となる患者数が減少しているのか、あるいはより侵襲の低い外科手術(定位温熱凝固など)に移行しているのか、今後の状況を把握していきたい。

2. 教育・啓発活動

研修活動は、2022年度も引き続きWeb開催で行われた。医師向けのてんかん夏季セミナーは2021年度の115名から46名と減少したが、看護師研修会は2021年度が632名、2022年度が501名、臨床検査技師研修会は2021年度が381名、2022年度が338名とほぼ同数の視聴者数であった。学校や保育園の先生などに向けた専門職のためのてんかん研修は、2021年度が73名であったのにたいして、2022年度は1370名と大幅に増加した。このような職種でとくにてんかん研修の要望が高いことが認識されたので、今後も継続していく予定である。市民向けの講演会は2022年9月12日から26日までWeb開催され、この期間に369回の視聴回数があった。これは2021年度の173回より倍増し、Web開催により、手軽に講演を視聴することができる便利さが一般市民にも広がっている印象を受けた。今後も研修セミナーや一般向けの講演会は、Web開催の形態で、教育・啓発活動を行っていく予定である。

3. 新潟大学および地域の基幹病院との診療連携

2015年10月から新潟大学脳神経外科との診療連携がはじまり、高磁場MRI(3テスラ、あるいは研究用の7テスラ)、FDG-PET検査を大学に依頼して、てんかん外科の術前評価を行っている。特に3テスラMRIとFDG-PETは焦点てんかんにおいての有用なモダリティで、近年検査を依頼する件数が増加している。さらには脳研究所統合機能センターの7テスラMRIを用いたてんかんの画像研究にも取り組んでいく予定である。

新潟県の他の地域との連携に関しては、県北部の県立新発田病院、中越地区の長岡赤十字病院、魚沼基幹病院、上越地区の県立中央病院などを地域の基幹病院として、今後さらなるてんかん診療連携の強化をはかる予定である。

4. 今後の課題と改善点

2022年度の新規患者数の落ち込みについての検討が必要と思われる。単なるCOVID-19のパンデミックの影響が残っていたための受診控えであれば、今後回復していくものと思われるが、それ以外の要因であれば、てんかんの啓発活動を一層強化していく必要があると思われる。Webを用いた研修セミナーや市民講演会は一定の効果を得られていると思われるので、医師のみならず、コメディカルや専門職、一般市民へのてんかん診療の啓発活動を継続することが重要と思われる。

*てんかん治療連携協議会委員

新潟県福祉保健部障害福祉課長 島田久幸

新潟県精神保健福祉センター所長 阿部俊幸

新潟大学脳神経外科助教 平石哲也

日本てんかん協会新潟県支部代表 矢部日出海

西新潟中央病院副院長 遠山潤

西新潟中央病院てんかんセンター長 福多真史